「力一杯の空振りもいい」――ツイッター相談の名言集

ポプラ社から 志茂田景樹氏に聞く

「力一杯の空振りもいい。芽が出ないなんて嘆かないでいいったら」――ツイッターのフォロワーから寄せられた相談に対し、日々、真摯な姿勢で答え続ける作家・志茂田景樹氏。その心温まる言葉がネット上で話題を呼び、2010年4月の開始以来、フォロワー数は増加の一途を辿っている。ポプラ社は、これまでの同氏のツイートから152を厳選した『人って、みな最初は石ころだもの』（本体952円）を9月7日に刊行、「人生」「恋と愛」「思いやる」など、全7章で紹介している。このネットメディア発の新刊について、志茂田氏に話を聞いた。

（聞き手＝冨田　薫）

――ツイッターを始めたきっかけを教えてください。

「もともと自分の近況や講演の予定、本の発刊などを告知するために始めた。しかし、それだけではもったいない。これをひとつの表現の場と捉え、自分が日頃漠然と思っていることを発信し始めた。すると、次第にフォロワーが増えていった。2010年の秋には1万人を超え、現在は22万人に達している。これまでに、取材は15件以上受けているのではないかと思います」

――最初に寄せられた相談は覚えていますか？

「どんな質問にどう答えたかは覚えていない。リプライ（返信）が質問になり始めたのは去年の秋ごろから。気になるものに対してひとつふたつ答えているうちに、相談が急増してきた。1日に1～2時間割いて、10～20件くらいに答えています。質問者は40代の中年男性もいれば中高生もいますよ」

――記憶に残っている質問はありますか？

「振り返るとあまりない。というのも、答えたものはすべて忘れるようにしているから。『済んだことは忘れてしまおう』という思いが強いんです。引きずっていると新しい方に向かえませんからね。これまでにどれだけの質問が寄せられたかは分かりません が、1日50件以上は来ているでしょう」

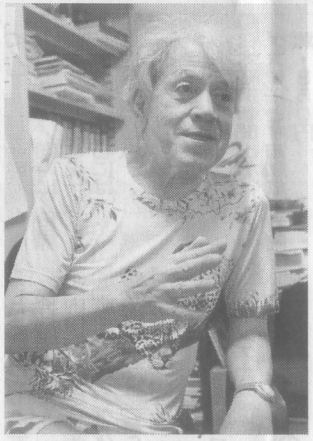
――今回、ツイッターから紙の本が生まれました。これも広い意味での電子書籍だと思いますが。

「そうですね。やはり電子のなかの表現ですから電子書籍の一部でしょう。これは、要は不定期連載のようなもの。これからは、こうしたネット発の紙の本は増えていくと思います。この3年は急激な変化の時期。今とは違う共存形式が生まれていくのではないかと思います」

――現在、国をあげて電子化作業を進めていますが、どのように捉えていますか。

「とてもいい試みです。試みないことには、良い状況を築けるかどうかなんて分かりませんから。しかし、現況は6万点の電子化の目標に対して2000数百。ひどい話ですよね。

でも、考えてみると編集者はえらく大変。紙の編集作業だけでも忙しいなか、『補助金が出るからドンドンやれ』といわれても難しいでしょう。かといって、人員を確保してもコスト的には合わない。そういう意味ではジレンマの時期。それでも、出版社は電子出版を本格的に手がけ始め、この先区別はなくなっていく。そのなかで、うまい相乗効果を生み出すことに情熱を傾ければ、必ず出版界全体の活性化に繋がる。出版社が大きく変わっていく時代に入っていると思います」



「済んだことは忘れる」という志茂田氏